

史料との出会い

On Reading Historical Sources

佐々木 孝弘
SASAKI TAKAHIRO

東京外国語大学大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies, Graduate School of Global Studies

Quadrante, No.22 (2020), pp.289-293.

退職を前にしてこれまでの研究業績一覧表と簡単なエッセイを書くようにとの編集委員会から依頼を受けて、これまで自分が行ってきた研究を現在の時点からもう一度ふりかえる機会を得ました。以下、ごく簡単にどんなことを考えて研究を続けてきたのかまとめてみたいと思います。

私はもともと人種差別がなぜ起こるのかを歴史の中で検証したいという関心からアメリカ合衆国南部の歴史を研究し始めました。歴史家として最初に取り組んだ大きなテーマはジョージア州におけるポピュリスト運動の中でアフリカ系アメリカ人やユダヤ人に対する差別や偏見がどのように生成してくるのかを「人種」や「ジェンダー」の視点から検討してみるというものでした。この検討作業を通じて白人男性の心理の中で女性の「セクシュアリティ」をめぐる不安が予想以上に強かったことを確認した私は、次にリンチ事件やレイプ犯罪の問題に関心をもつようになり、ノースカロライナ州の法廷に残されていたレイプ裁判の記録を丹念に読むようになりました。

その後、私の関心は工業化が進展して賃金労働が増えていく中で家族の中の政治力学がどのように変化していったのかという問題に移り、その観点からノースカロライナ州の離婚や

既婚女性の財産管理権の問題を法律の改正や訴訟から考察するというテーマに取り組みました。また、ノースカロライナ州アラマンズ郡にある綿紡績工場の記録を読み、この工場で働く従業員家族について、家族内の政治力学がどのように変化していったのかを考察しました。そして、最近の10年間ほどは、奴隷制度廃止前後という社会秩序が大きく変わる時期に、白人およびアフリカ系アメリカ人の家族がどのように変化したのか、奴隷所有者やその家族と奴隷とされていた人たちとの関係がどう変化したのかという問題を追及しています。

このように、追及してきたテーマは40年間の時の推移とともに変化してきていますが、史料に向き合うときの私の姿勢は変化しませんでした。それは、記録を残した人がどんな人で、記録したときにその人がどのような状況に置かれていたのかということを十分に調査した上で、記述を読んでいくという姿勢です。これは当然のことのように聞こえるかもしれませんが、実際にはリサーチの効率との兼ね合いでなかなか実現するのが難しいことです。単なる情報をピックアップするのは異なり、時には史料には書かれていないことを読まなければならないからです。



史料との出会い

ひとつ、具体的な例を挙げましょう。2001年から2004年にかけて、私はジョージア州アトランタの鉛筆工場で働いていた当時13歳の白人少女メアリー・フェイガンの殺害事件について集中的なリサーチを行ないました。2003年から2004年にかけて1年間文部科学省の在外研修でノースカロライナ大学に滞在することができたので、この滞在期間中何度もジョージア州へ足を運び調査を行ないました。今でも強く記憶に残っているのは、2003年10月に1913年当時にメアリーの住んでいた家のあった地点から彼女が勤務していた鉛筆工場のあった地点まで徒歩で歩くということを3回にわたって実行したことです。1913年から2003年までの90年間にアトランタの状況は大きく変わっていました。高速道路（ハイウェイ）の建設など都市の再開発に伴い、かつての道路は寸断され徒歩での移動が簡単ではなくなっていたからです。それでも、1910年当時の地図と2000年に発行された現状の地図のふたつを携えて、3度この地域をくまなく歩きました。

私の目的は、メアリー・フェイガンが通勤に使っていた路面電車を利用しないで歩くことによって片道の運賃10セントを自分のポケットに入れることが可能だったことを確認するためでした。3回の現地調査の結果、メアリーが当時運行していた路面電車の路線通りに歩いたとしても恐らくは40分か45分で、近道をしたとすれば35分ほどの時間でたどり着くことができたことが判明しました。これならば、メアリーはその気になれば通勤に使う片道10セントを自分のポケットに入れて歩き、このようにして貯めた現金を使って、仕事のあとに映画を見て帰るといったことが可能だったことになります。このことに関して、メアリーの母親は、娘は良い子で「給料袋を自分では開けずにそのまま私に渡す」と証言していました。他方で、彼女の夫（メアリーの継父）は「娘は仕事が終わったあと映画を見に行くことがよくあった」と警

察の取り調べに答えています。この一見矛盾する親たちの証言は、どのように解釈したらよいのでしょうか。映画を見るのにかかる費用（1回10セント）をどのようにメアリーは工面していたのでしょうか。職場まで歩いていくという方策は、私のこのような疑問に対するひとつの解答になり得るものでした。

もちろん、メアリー・フェイガンが実際に徒歩で通勤することによって浮いたお金を映画を見るというような自分の楽しみのために使っていたということを示す積極的な証拠は何もありません。ただ、娘が親に見せている姿と彼女の現実の姿の間には、大きな乖離があるかもしれないことを示唆しています。

私はこの自分の追体験を契機に、警察の取り調べや法廷の審理の記録を丹念に読み直してみました。その結果、大人が信じたいと思っている少女たちの姿と実際に工場で働いている少女たちの実像の間にはとても大きな距離があることが分かりました。それと同時に、メアリー・フェイガンの虚像が大人たちの都合から意図的に作り上げられていったプロセスが明らかになり、これまで他の歴史家が見逃してきた新しい解釈を展開することができました。（より詳しいことについては、以下の研究業績II-7を参照してください。）

歴史家にとって史料と出会うことは、他に代えがたいほどの喜びをもたらしてくれるものです。史料との出会いを通じて歴史家は自分の想像の翼を拡げることができるからです。退職後も、現在のコロナウィルス（COVID-19）をめぐる混乱が収束すれば、ときどきはノースカロライナへ戻り、また史料の海の中に身を浸す喜びを感じるようになるかもしれません。

研究業績

佐々木 孝弘

I. 著書 (全て共著)

1. 「産業化に直面した南部農業社会—トム・ワトソンの黒人認識の転換—」 本田創造編 『アメリカ社会史の世界』三省堂, 1989年, pp.143-170.
2. 「文化が社会の変化に抵抗するとき—ジョージア州ポピュリスト運動の生成要因とその性格をめぐって—」 遠藤泰夫・金井光太郎・佐々木孝弘他 『常識のアメリカ・歴史のアメリカ—歴史の新たな胎動—』木鐸社, 1993年, pp.193-244.
3. 「アメリカ合衆国南部社会におけるリンチ事件の考察—伝統コミュニティの揺らぐ家父長制とジェンダー—」 下村由一・南塚信吾共編著 『マイノリティと近代史』彩流社, 1996年, pp.197-219.
4. 「脱走兵とジェンダー—南北戦争期のノースカロライナ州の事例から—」 立石博高・篠原琢共編著 『国民国家と市民—包摂と排除の諸相—』山川出版社, 2009年, pp.92-115.
5. 「離婚訴訟に見る婚姻の意味とその変化(1814年—1933年)—ノースカロライナ州の場合—」 金井光太郎編著 『アメリカの愛国心とアイデンティティ—自由の国の記憶・ジェンダー・人種—』彩流社, 2009年, pp.87-110.
6. 「外に向かって開かれた家族とコミュニティ—1900年、ノースキャロライナ州ダーラム市のアフリカ系アメリカ人たち—」 樋口映美編著 『流動する〈黒人〉コミュニティ—アメリカ史を問う—』彩流社, 2012年, pp.43-70.
7. 「メアリー・フェイガンの墓—墓碑に刻まれた嘘とその意味するもの—」 吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編著 『画像史料論—世界史の読み方—』東京外国語大学出版会, 2014年, pp.176-180.
8. 「『サンボ』という表象とその意味するもの—『奴隷とされた人たちが』が生きた世界—」 長谷部美佳・受田宏之・青山亨編著 『多文化社会読本—多様な世界、多様な日本—』東京外国語大学出版会, 2016年, pp.169-180.
9. 「エリザベス・ミード・イングラムの日記を読む」 樋口映美編著 『歴史のなかの人びと—出会い・喚起・共感—』彩流社, 2020年, pp.113-126.

II. 論文

1. “The ‘Tempest in a Teapot’: The South and Its Reaction to the Roosevelt-Washington Dinner at the White House in October, 1901,” 『アメリカ研究』, 20号, 1986年, pp.48-67.
2. “American Periodicals and the Rise of Japan to a World Power, 1890-1920,” *Journal of the College of Arts and Sciences*, Chiba University, B-23, 1990, pp. 67-84.
3. “Social Origins of Intolerance in the American South,” *Journal of the College of Arts and Sciences*, Chiba University, B-24, 1991, pp. 65-70.
4. 「南部社会における家父長制とジェンダー—白人女性のレイプ事件を読み解く文脈を求めて—」 『アメリカ史研究』 20号, 1997年, pp.3-9.
5. 「黒人男性が白人女性をレイプするとき—アメリカ合衆国南部社会における人種, 階級, ジェンダーの構築過程(1820年—1920年)—」 『東京大学アメリカン・スタディーズ』 3号, 1998年, pp.75-93.

研究業績

6. 「アメリカ合衆国旧南部社会の基本構造（1820年－1865年）」『ポストコロニアル状況における地域研究 (2)』文部省特定研究報告 No.22, 1998年, 東京外国語大学海外事情研究所, pp.101-113.
7. 「殺された少女とその家族の表象——メアリー・フェイガン殺害事件とレオ・フランクのリンチ事件再考（1913年－1915年）——」『クアドランテ』5号, 2003年, pp.191-206.
8. 「ノースカロライナの農場からコットン・ミルへ——移住に伴う家族内の権力関係の変化——」『アメリカ史研究』26号, 2003年, pp.35-52.
9. 「アメリカ合衆国南部社会における黒人家族の成立過程と暴力——再建期ノースカロライナ州ピードモント地域の人種、階級、ジェンダー——」『アメリカ研究』40号, 2006年, pp.1-17.
10. “Gender and the American Civil War: Some Episodes in North Carolina during the Civil War and Reconstruction,”『クアドランテ』10号, 2008年, pp.67-76.
11. 「財産管理権獲得をめぐる女性の闘い——1868年ノースカロライナ州憲法の制定とその意義——」『アメリカ史研究』34号, 2011年, pp.36-52.

III. 学会動向、書評、解説コラム記事、エッセイなど

1. 「書評 長田豊臣『南北戦争と国家』」『歴史学研究』659号, 1994年, pp.72-74.
2. 「近代世界の相対化とアメリカ例外主義の克服——『常識のアメリカ・歴史のアメリカ』執筆の意図と今後に残された課題——」『アメリカ史研究』17号, 1994年, pp.31-34.
3. 「日本におけるアメリカ史研究の現状と問題点——アメリカ史研究会の創立20周年に寄せて——」『アメリカ史研究』18号, 1995年, pp.25-29.
4. 「1996年の歴史学界 回顧と展望 アメリカ（北アメリカ）」『史学雑誌』第106編5号, 1997年5月, pp.391-395.
5. 「書評 辻内鏡人著『アメリカの奴隷制と自由主義』」『史学雑誌』第108編1号, 1999年1月, pp.109-115.
6. 「書評 上杉忍著『公民権運動への道——アメリカ南部農村における黒人のたたかい——』」『歴史学研究』, 735号, 2000年3月, pp.57-60.
7. 「書評 和田光弘著『紫煙と帝国——アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済——』」『アメリカ史研究』, 24号, 2001年, pp.102-105.
8. 「本田創造先生の思い出」『毅然として』ゴトー印刷, 2001年, pp.160-162.
9. 「辻内鏡人さんにはじめてお会いしたときのこと」辻内鏡人追悼文集編集委員会編『言葉——辻内鏡人追悼文集——』光陽印刷, 2001年, pp.71-72.
10. “Summary of Discussion,” Proceedings of the Kyoto American Studies Summer Seminar, July 25-July 27, 2002.
11. 「2007年の歴史学界 回顧と展望 アメリカ（北アメリカ）」『史学雑誌』第117編5号, 2008年5月, pp.389-392.
12. 「コラム アメリカ合衆国南部社会におけるリンチ事件とジェンダー」石川照子・高橋裕子共編著『家族と教育』（ジェンダー史叢書2巻）, 明石書店, 2011年, pp.303-304.
13. 「コラム1 『ダーラムの理髪師』ジョン・メリックとリンカン病院の建設」樋口映美編著『流動する〈黒人〉コミュニティ——アメリカ史を問う——』彩流社, 2012年, pp.71-74.

IV. 翻訳

1. ニール・R・ピアス, ジェリー・ハグストローム著, 中屋健一監訳『ザ・ブック・オブ・アメリカ』実業之日本社, 1985年. 共訳書. 本書のうち、バーモント州 (pp.195-203) とノースカロ

ライナ州 (pp.359-377) を分担.

2. ジョン・ホープ・フランクリン著, 本田創造監訳『人種と歴史—黒人歴史家のみたアメリカ社会—』岩波書店, 1993年. 共訳書. 本書のうち、第5章 (pp.101-132) と第7章 (pp.151-179) を分担.
3. ヴィッキー・ルイス編著, 和泉邦子・勝方恵子・佐々木孝弘・松本悠子共訳『差異に生きる姉妹たち—アメリカ女性史における人種・階級・ジェンダー—』世織書房, 1996年. 本書のうち、第3章「顔をつくる—化粧品産業とジェンダーの文化的構築、1890年—1930年—」(pp.89-134) を担当.
4. 荒このみ編, 『史料で読むアメリカ文化史 2—独立から南北戦争まで—1770年代—1850年代』東京大学出版会, 2005年. 共訳書. 「南部プランターの世界観—ジョージ・フィッツヒュー『南部社会論』—」(pp.264-273) を担当. 原典史料の翻訳と解説.

V. 事典の項目執筆

1. 『歴史学事典 第3巻 かたちとするし』弘文堂, 1995年. 担当項目:「アンクル・サム」, 「サンボ」.
2. 『歴史学事典 第4巻 民衆と変革』弘文堂, 1996年. 担当項目:「アフリカ帰還運動」, 「クウ・クラックス・クラン (KKK)」, 「黒人差別」, 「ジェシー・ジェームズ」.
3. 『歴史学事典 第5巻 歴史家とその作品』弘文堂, 1997年. 担当項目:「ウッドワード」, 「ホフスタッター」.
4. アメリカ学会編『アメリカ文化事典』丸善出版, 2018年. 担当項目:「クウ・クラックス・クラン (KKK)」.